

〔付〕【漢詩の紹介】以下に、代表的な漢詩三首を紹介する。

☆漢詩と言えど誰でも知っているのが、李白、杜甫、である。「詩仙」と称される李白は絶句を得意とし、その豪放な詩風は、天馬空を行くが如く、筆の運ぶにまかせて句が出来あがるという天才詩人であった。

この詩は七言絶句（一句七文字、四句からなる詩）で、初めて蜀の地を出て都に向かう二十五歳の時の作とされている。詩では「一日還」とあるが、実際には一日で江陵まで三日ぐらいかかる。又、中国では猿の鳴き声を聞くと悲しくて腸が断ち切れると言われており、これが郷愁や感傷を呼び起こしている。当時の民謡に「巴東三峡巫峡長し、猿鳴いて一声涙裳を沾す」とある。

早發白帝城 李白

朝辭白帝彩雲間 朝あしたに辞す白帝彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵一日にして還る

兩岸猿聲啼不住 兩岸の猿声啼いて住やまざるに

輕舟已過萬重山 輕舟已に過ぐ万重ばんじゅうの山

〔註〕○早…朝早く。○白帝城…四川省奉節県の東十二里にある。

☆次に日本人の詩を紹介する。作者の広瀬淡窓は江戸時代、大分の日田の人で、詩題にある桂林莊という学習塾を開いた。この詩は塾生達に示した雑詩四首の一で、異郷で、川流を汲んだり薪を拾ったりする清貧の合宿生活をしながら勉学する姿を詠ったものである。「同袍」は『詩經』にある言葉で、綿入れを一緒に着合う事で親友の交わりを意味している。詩吟で好んで詠われる詩の一つである。

桂林莊雜詠示諸生 桂林莊雜詠諸生に示す 広瀬淡窓

休道他郷多苦辛 道いうを休やめよ他郷苦辛多し

同袍有友自相親 同袍どうぼう友有り自から相親しむ

柴扉曉出霜如雪 柴扉さいひ曉に出づれば霜雪如し

君汲川流我拾薪 君は川流を汲くめ我は薪たぎを拾わん

☆次は、李白と並んで、「詩聖」と称される杜甫の五言律詩（二句…五文字、八句か  
らなる詩）を紹介する。杜甫は憂愁の詩人と呼ばれ、その詩は「杜甫一生憂う」と  
評されるように、沈痛・憂愁を基調とし、雄渾・忠厚に満ちている。

この詩は七五七年、安史の乱で、安祿山軍に占拠された長安に軟禁され、幽閉二年  
目を迎えた杜甫四十六歳の時の作である。首聯（二句／二句）は、古今の絶唱と言  
われ、誰一人知らぬものがないほどである。「春望」とは春景色の事、「城」は長安の  
町の事で、日本のお城とは異なる。

「日本人が一番好きな漢詩」のアンケートで常にトップになっている詩である。

春望

杜甫

國破山河在 国破れて山河在り

城春草木深 城春にして草木深し

感時花濺淚 時に感じては花にも涙を濺ぎ

恨別鳥驚心 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火連三月 烽火三月に連なり

家書抵萬金 家書万金に抵る

白頭搔更短 白頭搔けば更に短く

渾欲不勝簪 渾べて簪に勝えざらんと欲す

（註）○春望…春の眺め、春の景色。○国破…国都長安が破壊されること。○城…

長安の町。○時…時節、時世。○烽火…のろし。○三月…三か月。○家書…家  
族からの手紙、○抵…相当する、値する。○簪…髪に挿して冠を固定するピン。